

No.133



昭和51年12月15日創刊

宮城県登米農業改良普及センター  
～人と技術で次代を担う経営体の育成～

〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字西佐沼150-5  
TEL (代)0220-22-6111 FAX 0220-22-7522  
E-mail : tmnokai@pref.miyagi.lg.jp  
URL : <http://www.pref.miyagi.jp/site/tmnokai>



登米市米山町のいちごハウス

## 史上最大の転作をチャンスに変える

技術次長（総括担当） 伊藤 嘉彦

米の生産調整は、平成30年産から数量配分が廃止され、需給バランスを維持するための目標として「生産の目安」が設定されました。

登米市は、令和元年、2年と「生産の目安」を超過しており、この事実を我々は真摯に受け止めなければなりません。

昨年11月に令和3年産主食用米の「生産の目安」が公表され、登米市53,577tで、過去2か年超過していることから、体感的にはもっと大きな減産となります。

いよいよ史上最大の転作割合4割の時代が始まります。「生産の目安」を達成できなければ、需給と価格のバランスが崩れ、米価は、たがを外したように下落することが予想されます。今年が正念場、生産者、関係機関が一丸となりオール登米で知恵を出し、稲

作経営維持のため「生産の目安」を死守しなくてはなりません。

一方、登米市は県内でもトップクラスの汎用化水田が整備され、有機物の供給体制も十分で、土地利用型作物の作付環境が整っています。史上最大の転作が始まることをチャンスと捉え、5年先10年先を見据え、産地交付金に頼らず再生産できる経営を目指し、例えば高収益作物を地域ぐるみで取り組んでいくなど、柔軟かつ大胆な発想が必要となってきます。

宮城県では、園芸産出額の目標値を620億円とする新しい園芸振興戦略プランを策定中です。東北で2番目の農業産出額を誇る登米市において、620億円の何割を占めることができるか、我々農業改良普及センターもうかうかしてはいられません。

## プロジェクト課題活動の紹介

### No.1 土地利用型農業法人の体制整備による経営安定

(株)石ノ森農場は、水稻+野菜+花きを経営する若手社員中心の一戸一法人であり、所得向上と周年雇用を図るため平成28年に施設きゅうり栽培(25a)に取り組み、さらに令和元年度から環境制御設備付施設(50a)を導入しました。この規模拡大に伴う雇用の増員が見込まれたため、経営の安定に向けた基盤づくりに向け支援を行いました。

#### ○作付計画、労働配分への支援

令和2年度のきゅうり部門に係る労働時間をもとに、作業毎の時間割合を示したところ、計画的な労働配分の実践に向け、週間作業計画等の導入による作業内容の周知や情報共有が図られました。

#### ○定例会議による社内体制確立への支援

リーダー育成と組織的な社内体制づくりを目指し、代表と部門リーダーによるリーダー会議を誘導したところ、定例会議や研修会が開催されるようになりました。

#### ○GAP手法を用いた生産管理支援

GAP(農業生産工程管理)取組事例の情報提供や作業環境の問題点(リスク)を提起したことから、整理整頓(2S)GAP研修会の取組が行われました。



労務管理研修会(株)デ・リーフデ北上へ視察

### No.2 きゅうり環境制御技術のスキルアップによる生産拡大

JAみやぎ登米胡瓜部会では、平成30年度から環境制御技術実証ほを設置し、環境測定モニターやCO<sub>2</sub>施用機を使用して技術実証を開始しています。普及センターではハウス環境の測定データを活用した栽培管理を進めるため、この技術の実践支援及び基礎的な知識の習得支援を行いました。

#### ○環境制御技術実践支援

技術導入者の環境測定データの活用支援や栽培コンサルティングセミナー等で学んだ内容の実践支援のほか、実績検討会を開催し、成果の確認や次作に向けた課題や対策について検討しました。実証ほの平均収量は年々増加し、今作では促成と抑制を合わせて33t/10aを超える結果となりました。

#### ○環境制御技術の基礎知識習得支援

技術導入を検討する生産者の知識醸成を図るため、既導入者の取組状況やセミナー等の内容を情報提供するとともに、導入者同士の情報交換の機会を設けるなど、技術のスキルアップを図りました。



現地ハウスにおける情報交換会

### No.3 スマート農業を活用した業務用多収米の安定生産

登米地域における輸出用米の生産拡大とスマート農業を推進するため、ICT等に関心の高い3経営体を対象に、多収米「つきあかり」の安定多収栽培技術の実証と、ドローン等による省力化等について、関係機関と連携して昨年度から2か年間取り組みました。

#### ○多収米「つきあかり」の安定多収栽培技術の実証

乾田直播栽培の実証ほ設置や稲作情報による周知、検討会、巡回指導等を通じて、栽培技術の向上と生産者の確保・育成を支援し、実証ほで平均収量643kg/10a(目標660kg/10aの97%)を実証するとともに、管内全体で生産者75人、作付面積130ha、出荷量751tとなり、普及・定着が進みました。

#### ○ドローン、水位/水温センサーの活用による省力化等の実証

オペレーター講習会や防除協議会、巡回指導等を通じて、病害虫の適期防除等を支援し、防除作業やほ場水管理等の実績から、ドローン導入の目安(年間採算ライン面積:約68ha)と水位/水温センサー設置時の省力化(ほ場水管理回数が慣行の72%)を試算。ドローンによる防除は、管内で水稻580ha、大豆304ha、小麦26ha実践されました。



自動飛行ドローンによる防除

## No.4 技術・経営力の向上による青年等就農計画の目標達成

新規就農者の農業技術や経営管理の早期習得による経営安定を図るため、平成30年度に農業次世代人材投資事業経営開始型を活用した5経営体を支援しました。

### ○作業スケジュールを用いた個別指導等による個別カルテ作成と営農支援

年度初めに作成した作業スケジュールに沿って個別巡回し、営農状況の把握や技術支援を行いました。目標所得の達成に向けて、現在実績取りまとめを支援しています。

### ○集合研修会による技術力・経営力向上支援

「新規就農者向け簿記集合研修会（4回）」、「経営研修会」、「パソコン簿記研修会、勉強会（3回）」を開催し、複式簿記の基礎知識や資金繰り表の作り方、各自取引の仕訳方法等の習得を支援し、令和3年からは現在対象の5経営体全員が青色申告に向けて複式簿記による経営管理を実践しています。



作業スケジュールに沿った個別巡回

## 第2回普及活動検討会開催

令和3年2月8日（月）、県登米合同庁舎において、外部委員5人の出席のもと、普及活動検討会を開催しました。

今回は、令和2年度に実施した4つのプロジェクト課題の活動内容と成果、令和3年度の新規課題案を説明し、これらに対して様々な意見をいただきました。

この中で、きゅうりの環境制御技術は、産地として若い世代が導入すべき技術なので、ぜひ普及させてほしいという意見や、新規に取り組む乾田直播の課題については、現地で蓄積された技術がまとめられ、コスト分析など経済性を含めたマニュアルが作成されることに期待するといった意見が出されました。また、今年度、目標を達成できなかった課題については、その要因と対応策を対象者と共有しながら、引き続き取組を進めてほしいとの意見もありました。

今回いただいた意見や要望を、今後の普及活動に活かしてまいります。



開会挨拶をする佐藤普及センター所長

## 登米市産花きと生花店がコラボした販売会を開催

新型コロナウイルスの影響により花きの消費低迷が続いていることから、初の試みとして市内3生花店と連携した商品づくりを企画・提案し、県登米合同庁舎、登米市役所及びJAみやぎ登米の職員に注文販売を行いました。第1回は「いい夫婦の日（11月22日）」向けに令和2年11月20日、第2回はフラワーバレンタインとして令和3年2月10日に開催しました。

1回目は、登米市産のばらや鉢物のシクラメン、アッサムニオイザクラを、2回目はストックやばら、鉢物のプリムラを、生花店のプロの技で綺麗にアレンジしたスタンディングブーケやラッピングした鉢植えを多くの方々に購入していただきました。

販売日当日は、テレビの取材もあり、購入者は「妻に買いました。いつも仕事で遅く帰ってきても温かく迎えてくれるので感謝を込めて」などのコメントがありました。今後も、県内の花の産地「登米市」のPR、関係者の連携による地元産花きの販売促進に努めていきます。



登米市役所でのバレンタイン向け販売会

高病原性鳥インフルエンザの発生を防ぐため、鶏舎への野生動物の侵入防止と消毒を徹底しましょう。

## 登米地域農業法人セミナーを開催

令和3年2月2日（火）、県登米合同庁舎において、農業法人を対象に登米地域農業法人セミナーを開催しました。

「コロナ禍における農業経営リスクとその対応策」と題して、株式会社日本政策金融公庫仙台支店農林水産事業融資第二課長 石川智章氏から講演いただきました。また、情報提供では、農業関係の各種保険制度について、宮城県農業共済組合迫支所、みやぎ登米農業協同組合の方から情報提供いただくとともに、当部から各種補助事業について説明しました。

講演では、農業経営におけるリスクとその対策について、具体的な事例の紹介と金融機関の役割、また、損益計算書分析の着眼点や経営課題解決に向けた要因分析等について、解説していただきました。

参加者からは、「資金繰りや計画的な管理の重要性が分かった」、「過去の決算書をもう一度見直したい」などの意見が聞かれました。今後の経営発展が期待されます。



課題解決には「見える化」がポイント

## ブラウ耕乾田直播・水稻低コスト栽培技術研修会

令和2年12月1日（火）、県登米合同庁舎において、令和2年度食料生産地域再生のための先端技術展開事業「ブラウ耕乾田直播・水稻低コスト栽培技術研修会」が開催されました。

最初に農研機構東北農業研究センターから水稻乾田直播栽培について、播種床づくりや施肥、播種、雑草防除について、特に播種時に行う鎮圧は、種子と土壌が密着し苗立ちが向上するほか、水田の漏水抑制につながるなどの説明がありました。次に古川農業試験場から乳苗等高密度播種苗と疎植栽培を組み合わせた移植栽培について説明がありました。最後に農業機械メーカーから新しい農業機械等の情報提供がありました。

県内の水稻直播面積は3,684ha、うち乾田直播は1,631haの44%で、登米市の直播面積は約530ha、うち乾田直播は375haの70%を占め、年々増加しています。ブラウ耕乾田直播は畑作農機を活用し、苗づくりの省力化や低コスト生産が可能になるなど注目されています。



ブラウ耕乾田直播・水稻低コスト栽培技術研修会

## 登米市の元気ファーマー さとう たろう 佐藤 太郎さん(東和町・繁殖牛)



東和町の和牛繁殖農家の佐藤太郎さんは、令和2年4月に就農しました。佐藤さんは、宮城県農業高校を卒業後、畜産を学ぶため岩手県立農業大学校に入学し、卒業後は(株)百万石牧場とJA全農北日本くみあい飼料(株)藤沢牧場に就職し1年間ずつ技術を学び知識を深めました。

佐藤さんは、幼い頃から農業、特に和牛繁殖の仕事に触れて育ち、将来は和牛繁殖経営を仕事にしたいと考えるようになりました。

現在は、自宅前の畜舎や近くの草地を活用して母牛20頭を飼養しており、計画どおり順調に経営されています。抱負を伺うと「毎日が勉強であるが楽しい。将来は地域の担い手となるように頑張っていきたい」と意気込みを語ってくれました。

春の農作業安全確認運動 ～令和3年4月1日から6月30日まで～

スローガン ◇◇◇見直そう！農業機械作業の安全対策◇◇◇